

『廃村』考補遺

An Essay on *The Deserted Village*

山本 和平

Oliver Goldsmith の *The Deserted Village* (1770) は五詩脚カブレット 430 行の長詩である。故郷 Auburn 村（架空の村）の変わりへはた姿を見た帰郷者の郷愁と変えた者への抗議を基調とする一種の牧歌調悲歌である。この詩の背景には、18 世紀後半から 19 世紀初頭にかけてイギリスの地方に展開されたエンクロージャーという社会的事実があり、そうした事実に対して文学がいかに反応したかという、いわば「文明」への関心から、かつてこの詩を論じたことがある。（『ゴールドスミス思想と方法—*The Deserted Village* を中心に—」金沢大学法文学部論集文学篇 No. 9 1961）

二、三不可解な点を残しながら、それなり放置しておいたが、もういちど読みなおす気を起こしたのは、Raymond Williams: *The Country and the City* (1973) という浩瀚なる本を一読し、その中で当然のことながら、この詩が分析されているのを見たからであった。

正直言って Williams 氏の所説は、私がかつて問題にしたような点を含んでおり、分析もさほど切れ味のよいものとも思えなかった。ただイングランド原住民の強みで、一読直解、

文献博搜、つまりは射程距離の深さ、万事につけ太刀うちできない理である。

そういうことは改めて申すまでもないことだから、「二、三の不可解な点」として残ったと前に述べたことをまず言う。むろん今不可解が可解になったから言うのではなく、いぜんとして分からない部分があるし、それは Goldsmith にだけ拘泥してはけっきょく可解にはならぬ性質のもので本質的にはあるのであろう。だがまずものごとは具体から一篇の詩から出発しなければいけないし、一般論の空虚さは文学批評において致命的である。

それはそれとして、この *The Deserted Village*——さてこれをどんな日本語に移そうか。The Oxford English Dictionary を引くと 'deserted' の項に 'forsaken, abandoned, left desolate' とあり、この詩の表題がその例としてかかげられている。「(村人に) 棄てられた村」。その結果「荒廃の状態にすておかれた村」ということだから「廃村」とでもするか——に描写された村の二つの対照的状态、すなわち「過去の幸福な村」と「現在の荒廃した村」のそれぞれは、歴史社会的事実として正確であるかどうか、つまり事実の

「反映」という問題がひっかかっていたことのひとつであった。

一般に詩が社会史的事実を正しく反映しているかどうかと問う問自体が無意味であるという声もある。詩はひとつの言語芸術として現実世界とは断たれている。そこに「歴史や社会や作家の伝記やらを導入することは文学批評としてまちがっている」と説く。さあそれほど簡単にコトバから「現実」を追放できるか大いに疑問であるが、その点にはまあ目をつむむとして、この『廃村』という詩の内容素材が、まさに当代の廃村という社会的現実にかかわって発想されている以上——「いや、社会的現実ではない。人間的事実だ」というならそれでもよい。Goldsmith が、ある文学外的事実に揺り動かされた、というこの詩の発想を認めさえすればよい——詩的描写における村と社会史的事実としての村とをつき比べてみようというのも自然の心理、当然の手続きとして生じてくるだろう。（そしてもし詩人が煽動家という懐かしい職分を担うものとしたら、読者を社会史的事実に注目させ、そのなかへ突き戻してやることができなければならないことではないか。）

そんなわけで、実際、『廃村』が社会史的事実の反映の度合如何ということは、『廃村』を論ずるにあたって今までほとんどかならず言及されてきている（前掲拙論参照）。

だから Williams 氏が『廃村』を論じて、詩人の観察感覚、正確にして明瞭な社会的位置づけを称揚し、傍証として「どこの地方へ行っても、その土地の一部の住民が巨富を蓄え、のこりは惨めな貧民になりつつあり、あの幸福な平等の姿はいまやすっかり姿を消した……この国ではほとんどどこの地方でも額に汗する百姓は零落している」という観察を引用しているのも私は別におかしいとは思わない。むしろ元来の Williams 氏の文学思想からみ

て当然の手続きであるとしなければならない。だが——これは後で論ずるつもりだが——現在の地方農村の姿の観察の正確さとは対照的に、過去の「村」の理想化された描写、またそうなりゆく詩人の内的メカニズムを、ほとんど否定的に、ということは事実の反映でないがゆえに、歴史的発展の一相としての過去の現実をリアリシックに反映してないがゆえに、否定的に見てしまう——おそらく無意識裡に——Williams 氏には私は賛同しがたいものがある。Goldsmith がこの詩を創作する際の内的メカニズムの分析はほぼ的を射ていると思うが、それは本来 Williams 氏にとっては、リアリズムでなければならないのになぜそうなりえなかったのか、なぜ「文学的完成」に到達し損ったのか、失敗の原因の追及としてあるように私にはみえる。はたしてこの詩へのアプローチとして Williams 氏のリアリズム論は有効であろうか私には疑問なのだ。

こうしたリアリズム論のほかに、私にはまだ「不可解な点」が残っていた。それはじつに大雑把だが、たとえば「共同体」というコトバは当時の私にはかなり大きな意味をもつコトバであったが——'community' あるいはこれに近い意味合いのコトバとしては、George Eliot の 'fellowship' などもあった——それというもこの「共同体」というコトバを文学概念に練りあげることができないかという気があり（この関心がじつは村落共同体の崩壊の詩『廃村』をひき寄せたのであったろう）その時、ともすれば手放しの「共同体」讚美におちいりそうなのに冷水をあびせる強力な反共同体論があった。それとどう折り合いをつけるのが問題だった。いまその一部を引用する。

「ここでこの数万の、勤勉な、族長的な、

そして平和な社会的グループが瓦解し、その構成部分に解体され、悲惨の淵に突きおとされ、その個々の成員がその古来の文化と同時にその伝来の生活手段を奪われるのを見るのが、人間の感情にとっていかに息づまるようなものであろうとも、われわれはこれらの牧歌的な村落共同体が、それがいかに無害なものに見えようとも、つねに東洋的専制主義の強固な基礎を形成し、人間精神を、考えうるもっとも狭隘な限界にとじこめ、この人間精神を、迷信の従順な道具に、伝説的な習慣の奴隷にし、そしてこの人間精神からすべての偉大さと歴史的に創造的ないっさいのエネルギーを奪ったことを忘れてはならぬ。」(マルクス「インドにおけるイギリスの支配」1853)

「人間の感情にとっていかに息づまるようなものがあるとも」村落共同体が「人間精神の創造的エネルギー」の展開の極端である以上、「人類の歴史的使命」の名において「イギリスの蒸気機関」と「イギリスの自由貿易」によって粉碎されてもよい、いや粉碎さるべきだというじつに剛直な、モラリスチックな断言が、『廃村』への共感に水をさしたのは確かだった。

『廃村』の「私」がかつての故郷 Auburn によせる哀惜 'Trade's unfeeling train' への抗議には、いい気な旦那気どりと自己憐憫がないとはいえないけれど、「人間の感情」の純一さにおいては疑うべくもないと思えた。この私自身の作品享受を、「人間精神の創造的エネルギー」とか「人類の歴史的使命」という理念から修正することよりも、今にして思えば、むしろ「人間精神」とか「人類の歴史」という概念のなかみを検討しなおすことの方が必須だったように思われる。

たしかに、Goldsmith には、エンクロー

ジャーによる資本主義の大農場経営の歴史的、進歩的意義を理解することはできなかったし、理解を強いられることもなかった。またそれがたとえ「人類の歴史的使命」であり「人間精神の創造的エネルギー」であるとしても、故里を追放される貧農の悲惨への共感を自らに禁ずることはできなかったろうし、また過去の Auburn のなかに描写された村人たちの共同体が「人間精神」の否定であるどころかまさに「人間精神」のひとつの展開ですらあったといえよう。

したがって「牧歌的な村落共同体」を冷徹な歴史主義精神で断罪するまえに『廃村』を再読する必要があった。それに『廃村』は社会的事実ではなく文学作品なのだ。

「二、三の不可解な点」の三番目は、『廃村』が Poetry への呼びかけで終わることである。いやその Poetry が村人もろとも村を追放される Poetry であるということである。この Poetry の内容はいかなるものか不明確のまま残った。

以下上述の点を中心に、Williams 氏の所説の検討をまぜながら私見を陳べたい。

『廃村』の「私」の幼い頃には、牧歌的な生活と秩序、うるわしい人間関係があったが、それは 'trade's unfeeling train' によって破壊されたと歌う。Goldsmith のこの詩によれば、「田園的イングランド」が失われたのは 18 世紀後半ということになる。ところが F. R. Leavis と D. Thompson によれば、「古きイングランド」の「有機的共同体」の消滅はごく最近のことであるという (Culture and Environment 1932) から、今世紀初頭までそれは存在したことになる。また Thomas Hardy が小説を書いていた時代は 1870 年時代から 1890 年代だが、批評家たちによれば Hardy (1840—1928) のうちに、田園

生活における危機的な変化があらわれているというし、George Eliot (1819—80) の 1820 年代、1830 年代初期を扱った小説についても同じことが言えよう。さらに遡って John Clare (1793—1864) においても「古きイングランド」の秩序の崩壊が経験されている。

「田園的イングランド」の崩壊を社会史的時点として特定しえぬことはほぼ明瞭で、これにはいろいろ理由があろう。そもそも「田園的イングランド」は客観的実在というよりも、超歴史的、超社会的な、頭の片隅に棲みつきたいわば一種の「幻」ではあるまいか。それは各個人の素朴で幸福な「神話時代」である幼年時代の、自然や人間との無意識の融即の経験のなかに根ざし、複雑で油断のならぬ実生活の汚濁のなかで想起されることによって純粋化され、強化され、理想化されていくだろう。追憶一般の浄化作用には多かれ少なかれ認められるところだ。むろん村落共同体での生活が悲惨と憎悪の経験だった者には、あるいは、そうした村落共同体を離れて後の都会の生活経験の方がまだましな貧民にとっては、理想化される契機がないのも当然である。ただ牧歌的イングランドの創出には、かならずしも村落共同体的生活経験を必要としないという面がある。つまり屈目された、風景としての自然的環境、旅人にとっての牧歌的世界がある。それは都会的生活環境への反措定としての、より自然に接した生活環境への憧憬でしかないにしてもである。そうした意味での「田園的イングランド」なら、極言すれば、イングランド全体が巨大都市に転化しないかぎり永遠に実在することになるだろう。

さて Williams 氏は、こうした、人間経験に、さらには詩とか文学に内在する 'mythopoeic thought' (神話形成的思考) には本来的に懐疑的なものではあるまいか。というより無感覚なのではあるまいか。(いわば超歴史

的にひとの魂にとりつく「幻」に無理解で、歴史のなかに……いや、「幻」の歴史性について究明することだという Williams 氏の声がする。しかし Williams 氏の頭にある「歴史」もたかだかギリシャから今日までの、ひょっとしたらヨーロッパ近代以降の歴史ではないのか。人類史の長さからしたらほんの瞬間ではあるまいか。時間の単位のとりの方でひとの経験の質もよほど変わってくるはずである。)

氏は、まずこの『廃村』は難解な詩であるという。一読して意味は明確で、たとえば村の牧師や教師の肖像は、「単純な幸福と野心に満ちた贅沢」との対比という牧歌の常套手段の中で描かれているけれど、ただこの静的な伝統的な対比が、過去の「幸福な村」と現在の「崩壊した村」という社会的次元での対比、「社会過程の描写らしきもの」であるために理解しがたいと言う。

私にはすこしも理解しがたくはない。なぜなら Goldsmith には、過去から現在への社会過程を歴史的発展のなかでとらえるという意識はまったくないのである。同じ村を描いた二枚の風景画、過去の牧歌的時代と現在の「廃村状態」との相容れない二相を対比させることが問題なのである。

Williams 氏は、前述したように、Goldsmith の事実のリアルな観察の側面を強調する。エンクロージャーによって村民を追い立てる企業家 ('One only master grasps the whole domain'), そしてその結果 (The man of wealth and pride/Takes up a space that many poor supplied; /Space for his lake, his park's extended bounds, /Space for horses, equipage, and hound.), そして追い出された人々の行方を辿る。まず共有地へ逃げる——

If to some common's fenceless limits
 stray'd
 He drives his flocks to pick the scanty
 blade
 Those fenceless fields the sons of
 wealth divide
 And even the bare-worn common is
 denied.

エンクロージャーがまだ継続しているわけだ。

都会へ逃げようとするとき――

If to the city sped——what wants him
 there?
 To see profusion that he must not
 share.

最後に新大陸へ移民せざるをえない一家の姿が描かれる。

こうした点を見ると、展望壮大に現実の歴史が眺められていると Williams 氏は言う。だのになぜこうした視点、こうした態度を一貫しえなかつたのかきわめて遺憾という口吻が感じられる。

なぜリアリズムを一貫しえなかつたか。これについての分析はかなり晦渋である。概念規定の不足もあって（たとえば 'structure of feeling'）論旨が明確に把握できない。が、おおよそ次のような意味と察せられる。

Goldsmith が村を追われた人々によせる共感は疑いないし、その村人たちの姿の描写もリアルである。しかしこうした社会集団の苦悩と詩人の苦悩（晩年の隠栖を期待していた故郷の崩壊、幼年期の「神話」の舞台の消失、そして詩人として「牧歌」展開の場の喪失）を同一化するときリアリズムを貫徹しえなくなったのだと、おおよそこのように要約できようか。

みずからの過去、幼年期の生活が想起の過程で mythopoeic thought により整序される傾向については前述した。そして牧歌調悲歌の常套として故人が形式的・一般性のなかで理想化されるように、ここでは故人がいまはなき故郷へと拡大された牧歌調悲歌のパタンの中でとらえられるのである。すなわち幼年期想起の際の神話化作用と牧歌的悲歌のパタンという二つのフィルターをかけられて眺めた Auburn 村がここにはあるのだ。「村の牧師」の高潔にして人間味あふれた描写といい、「村の教師」この厳格にして学問好きな論客のヒューモラスな描写といい、追憶と牧歌性の二重のフィルターを通して描かれるし、農民は、概して 'they' として一括的にとらえられ、牧歌的・一般性のなかで一種人形風に、非個人的に描かれ、遠景を構成する。現実の諸害悪によって追い出されたいっさいの美德が、この牧歌的 Auburn のなかに結集されるのである。しかもそれは「私」の幼年時代に実在していたものとして。

こうした牧歌的村落共同体の實在にたいして George Crabbe (1754—1832) は否定的であった。彼は明らかに Goldsmith を意識しながら、*The Village* (1783)——*The Deserted Village* の 13 年後である——において次のように自問する――

Then shall I dare these real ills to
 hide
 In tinsel trappings of poetic pride?
 (47—48)

Crabbe によれば、田園や家畜の群が 'charm' として映るのは、ただ農場主や家畜所有者の目にだけである。彼らに働かされる百姓は、つねに苦痛のなかで喘いでいるのだ。だのに「思い上がった詩の金ピカピカのお飾りしゃらしゃらで/現実諸悪を隠蔽しようなんてこ

の俺にできようか」というわけである。この詩にはそうした 'real ills' の描写が充満している。田園的平和とか無邪気さとか質朴さとかいうものの片鱗もない。「幻」の徹底締め出しである。Williams 氏はこうした Crabbe の反牧歌性を当然のことながら高く評価する。ここには回顧はない。理想化はない。対比されるのはただ現実の社会的（階級的）対比だけである。つまり、Williams 氏は Goldsmith の非歴史性を責めたが、ここには「歴史」（「過去」の描写）がまったく缺如しているから、分析を加えようにも加えられない理である。

過去の Auburn の描写の非現実性、非歴史性は、Williams 氏によれば、農民集団と自己の誤れる同一化から生じたとみているけれど、私はむしろ、過去の Auburn は最初から「幻の風景」として牧歌調悲歌のパターンのもとに描きだされるはずのものだったと思う。

そもそも「牧歌」的発想の根本には、Empson によれば、地方と都会、単純と複雑、naive と sophisticated といった対比のなかで具体化される緊張があり、単にこうした対比を現実あるがままに描いて見せることはやらずに、複雑なものを単純化するというのが常道である。つまり写実性は最初から主要関

心事たりえないのである。牧歌的精神が「社会的現実」を媒介するとき当然にその「現実」は牧歌的空間へと転位され変容を蒙るだろう。牧歌的精神は Empson の言うように 'double attitude' をもっている。詩人は、相対的に複雑な社会（都会）の代表として田園生活を理想化し、その淳朴さにおいて彼より道徳的に優れているとしながら同時にその生活は単調で退屈だと考え、この世を棄てる勇気がない。こうした 'double attitude' は確実に少数者の感情であって、Goldsmith 本人だって Auburn のモデルとされているアイルランドの Lissoy に本気で帰郷する気はなかったのが事実である。

Auburn は彼の poetry も共棲しうる「幻」の世界、ユートピアなのだ。ユートピアであるから社会史のなかに対応させ位置づけしえないのは当然のことである。ユートピア的世界とリアリステックに描写される現実世界との対立的共存——これが Goldsmith の描きえたぎりぎりの社会像であった。

（Raymond Williams 氏にかかわりすぎて、第一の「不可解な点」にしか言及しえなかった。論じ残した分については他日を期す。）